
今日からRTA部！

朝倉智行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日からRTA部！

【Nコード】

N9143T

【作者名】

朝倉智行

【あらすじ】

高校入学したばかりのナチュラルボーン凡人男子こと宮市奏は、みやいちかなでクラスNo. 1、いや学年No. 1のクールビューティ女子である香坂雅に一目惚れした。しかし、冷やかかな彼女に何を話しかけようと「別に」もしくは「関係ないでしょ」の二言でバツサリ切り捨てられる始末。一向に恋が進展しない奏だったが、ひょんなことから彼女の秘密を知ってしまう。まさか……彼女が○○○の世界記録保持者だったなんて！

□プロローグ（前書き）

※^{リアルタイムアタック}RTAとはなんぞや？

^{リアルタイムアタック}RTAとは、テレビゲームのプレイ開始からクリアまでにかかった時間の短さを競うプレイスタイルのことを言います。実時間（リアル・タイム）の短さを競う（リアルタイム・アタック）のでこう呼ばれます。ちなみに「リアルタイムアタック」という呼称は少し長いので、略して「^{リアルタイムアタック}RTA」と呼ばれることが多いです。

主にニコニコ生放送内にて、様々なゲームタイトルのRTAが行われて、参加者による大会やタイムを競い合う併走といった試みも行われています。

□プロローグ

高校の入学式から三日も経つと、僕には好きな女の子ができていた。

最初に心を奪われたのは、入学式。その子は入試をトップの成績でパスしたらしく、新入生代表として教壇に上がり挨拶を読んだ時だった。彼女の名前は香坂雅^{こうさかみやび}。綺麗な黒のロングヘアと広い体育館に通る澄み切った声。背は女の子としては少し高いが、プロポーズンは実に見事。出るところもキツチリ出ている。そして、挨拶を読み終えて、こちらに振り向いたときの整った顔つきに、キリっとした少し鋭い眼。これがクールビューティってやつなんだろうか。とにかく、紛れも無い美人がそこに立っていた。ああ、多分、これが一目惚れってやつなのだろうな。僕は、まだ一度も話してもいない相手だというのに、彼女を見て不思議とドキドキしてしまっていた。物事に順序をつけるなら、これが恋の始まりだったのだろう。

第一章 一 1

まずは自己紹介。僕の名前は宮市奏^{みやいちかなで}。少し前に高校生になったばかりのナチュラルボーン凡人である。ゆえに中学の時の学力は普通、運動もそこそこ、容姿もまあまあと、三拍子フラットに揃った人間であり、オマケに趣味がテレビゲームというのだから非の打ちどころがない。特技もこれといったものは無く、これからの高校三年間で見つけなければいいや、という楽天的な考えを持って地元の普通高校に進学した。その割には、高校に入ってからやりたいことの目星がこれといってあるわけでもなく、とりあえずノープランで高校に進学したという流木のような人生を進行中。けど、そろそろそんな人生に終止符を打ちたいという願望が高校入学と共に出てきていた。

——せっかくの高校三年間。時間はたっぷりある。

どこかの部活に入ってそこで覚醒してみるとか、中学時代では無縁だった恋に突っ走ってみるとか、何か新しい趣味を開拓してみるとか。ともかく、可能性は無限大。これからの高校生活で様々な選択肢があるということは僕にも分かっていて。……嗚呼、分かっていたさ。

実はこの考えを持ったのはこれが初めてじゃない。これと全く同じことを考えていた時期が以前の僕にあったのだ。

今からちょうど三年前。ちょうど同じように中学校に入学した時の話。

あの時も部活、恋、趣味。これから迎える学校生活を前に、何でもできるつもりだった。背が伸びてすっかり似合わなくなっていたランドセルからようやく解放された影響だったのだろうか。入学当初やたらとテンションが上がっていたことを覚えている。この男、ノリノリだったのだ。

じゃあ、その結果どうなったのか。

かいつまんで話すと、変な勢いとテンションに任せて入ったサッカー部は三カ月で退部。それなりの容姿しか持っていない僕が女の子に声をかける勇氣も無く、サバゲーでも始めようかとMP5とアーマーのフルセットを通販で揃えるも、そもそもやる相手がいないということに注文してから気づいたりもした。

そんなこんなで、中学校に入学してから三カ月もすると僕はすっかり冷めてしまっていた。部活も、恋も、趣味も。結局、何も見つからなかったし、見つける勇氣も氣力も次第に無くなっていった。それらが僕の本当に欲しかったものなのか、それとも入学したテンションに任せて面白半分で作っていただけなのか。その辺りが自身で分からなくなった。そして、中学三年間で僕が悟ったのは、結局どれも生活において必要不可欠な物ではないということだった。別に部活に入らなくても、彼女がいなくても、趣味が狭くても問題ない。今は喉から手が出るほど欲しい物なんてない。もし必要だったら、いつか自然と見つかるだろう。ってな感じで結局、行くことも引くこともせずに凡人ロードを突っ走った中学時代というわけである。

しかし、今回ばかりは違った。

高校の入学式から三日。僕には好きな女の子ができていたんだ。それもとびっきりで見たことも無いような子が。最初に心を奪われたのは、入学式。その子はトップの成績で入試をパスしたらしく、新入生代表として教壇に上がって挨拶を読んだ時だった。彼女の名前は香坂雅^{こうさかみやび}。綺麗な黒のロングヘアと広い体育館に通る澄み切った声。背は女の子としては少し高く、プロポーションも実に見事。そして、挨拶を読み終えて、こちらに振り向いたときのキリッとした感じの顔つき。これがクールビューティってやつなんだろうか。とにかく、紛れも無い美人がそこに立っていた。多分、これが一目惚れってやつなのだろう。僕は、まだ一度も話したこともない相手だというのに、彼女を見て不思議とドキドキしてしまっていたのだっ

た。そして、その気持ちはテンションに任せた面白半分の思いじゃない。紛れも無く本物だった。

とはいえ、僕もダテに中学時代を過ごしてきたわけじゃない。

一目惚れしたからといって、彼女と僕の関係がトントン拍子に進むなんて甘いことは最初から考えていなかったし、彼女の美貌に惹きつけられた男子は僕だけじゃないであろうことも予測していた。多分、これから彼女を待ち受けているのは、鯉の餌付けのごとく大勢の男子に囲まれ続ける高校生活なんだろうな。それに現時点で彼女に彼氏がいないなんて保障も無いんだ。あれだけの美貌なら既に恋人がいる可能性だってあるはずだ。いいか、落ち着いて考えてみるよ僕こと宮市奏。そうだな、例えば彼女が実は僕と同じクラスに配属されていて、しかも僕の机から半径5メートル、できれば3メートル以内の位置に彼女の机があるという席順だったらいいなあ、なんてのは高望みしすぎだ。せいぜい彼女と同じクラスになれるというのが現実的なラインだろう。といっても、今年度の一年生は6クラス編成らしいので、こっちも確率的には怪しいところだ。そんな奇跡が果たして起こるんだろうか。

——うん、起こったんだよ。僕も予想できなかったけどな。

奇跡を確認したのは、入学式後のホームルームだった。

結果的に彼女は僕と同じクラスで、しかも、彼女の席の真後ろに僕がピッタリマークしているというオマケまで付いていたのだ。これを奇跡と呼ばずして何と呼ぶのか。大きすぎる。僕にとってあまりに大きすぎるチャンス。とりあえず地の利を生かして、彼女の趣味、性格などの外堀を徐々に埋める作戦に出ることにした。もしかしたら、一目惚れを理由に勢いに任せて告白する人もいるかもしれないが、そんな真似が僕にできるなら、多分中学で充実した恋愛とやらを実行できていただろう。できていないから、現在進行形でこくなっているのである。ともかく声をかけないと始まらないので、彼女の背中をトントンと叩いたんだ。

「ど、どうも。香坂雅さん、だよね」

「そうだけど……何？」

「い、いや。特になんでもないんだけどさ。僕は、宮市奏っていうんだ。席も近いし一年間よろしくね」

「……ええ、よろしく」

「え、えーと、そうだ。香坂さんってどの中学校出身なの？」

「第二中学」

「へえー。都会の方なんだ。よく街に遊びに行ったりしてたの？」

「別に」

「そ、そうなんだ。よく映画とか見に行ったりしてたの？」

「……そんなのあなたに関係ないでしょ」

「ご、ごめん。そうだね。そ、それじゃ」

これが僕の記念すべきファーストコンタクトであった。『玉碎』。状況を二文字で説明するならこんな感じか。趣味を聞くどころか、会話時間は一分越えるか越えないかというところ。当初の予定はどこへやら。徐々に外堀から埋める作戦どころか、突撃した僕を待つ

ていたのは、彼女の氷点下のように冷たい言葉と体に突き刺さるような鋭い視線だった。結局、奇跡的な立地条件を引き当てた僕だったが、この絶好のチャンスを生かすことができなかった。急にボールが来たので……と、後で誰かに弁解したくなるような結末だったが、少し救いだったのは、この彼女の仕打ちを食らったのは僕だけじゃないということに気づいてからだった。クラスの輪を広げようと女子が話しかけてきても、はたまた僕みたいに彼女を狙ってやってきたイケメン風の男子が話しかけても結果は全て同じだった。誰が何を声かけようと、

「別に」

もしくは、

「……関係ないでしょ」

の二つを駆使してシャットアウト。これには、参ったね。

結局、入学式から一週間もすれば、彼女に声をかける人はいなくなってしまう。そのせいで、彼女はクラスからすっかり浮いた存在になってしまったのだが、男子の中では——誰が最初に彼女とまともな会話ができるのか、という賭けまで始まったのだった。

それから一カ月。僕は彼女のことをすっかり諦めていたかというとなんともなく、かといって攻略する自信や手段があるのかというとなんとも限りなくゼロに近かった。当初、男子の間で盛り上がっていた通称『香坂雅トトカルチョ』も今ではすっかり下火になってしまい、多くの男子がドロップアウトしていった。理由は簡単だ。誰が話しかけようと一向に状況が進展せず、賭けがそもそも成立しなかったからだ。そんな僕も見事に玉砕したファーストコンタクト以来、何度か声をかけてみるものの結果は変わらず。今日も今日とて静かな放課後を迎えているのだった。

そんな、ある日。傷心気分を切り替えようと、帰り際に地元の寂れた商店街をブラブラしていると、その隅でひっそりと営業しているゲームショップが目についた。店の看板にはレトロゲームショップ『スーパートマト』と書いてある。ただのゲームショップじゃな

い。あまり見慣れない『レトロ』ゲームショップという文字。そういえば以前、友達から聞いた話を思い出した。この店は、昔のゲーム、いわゆるレトロゲームを専門に扱う店で、巷では知る人ぞ知るといふマニア向けの店らしい。最新のゲームソフトを一切仕入れない為、どこことなく一般人が近寄りがたい存在だ。僕は一度も足を踏み入れたことはない。しかし、その日は特別だった。僕は気分転換にでもなればいいか、ぐらいの軽い考えで店の中に入った。

なんとなく予想通りだったのだが、店の中はレトロな雰囲気ですしり。どこかで見たような昔の清涼飲料のポスターや写真が所狭しと飾られていたり、どこから持ってきたのか分からない年代物の郵便ポストや青いベンチがオブジェとして置かれていたりする。もちろん、置いてあるゲームもそれに違わず、年代物の懐かしいソフトばかりが並んでいた。中には新品未開封の状態で保存してある数十年前のゲームや、ゲーム機本体と同じくらいの値段を付けられているプレミアソフトまで販売している。もちろん僕が知っているソフトや、プレイしたことがあるゲームソフトも結構置いてあり、パッケージを見るだけでどこか懐かしい気分になることができた。そんなゆつたりとした空気の店内を徘徊していると、奥の方に一箇所だけ雰囲気が異なる場所があった。そこはレトロゲームの試遊コーナー、つまりディスプレイ用に展示された何本かのレトロゲームをお試しで遊べるコーナーだった。

別にそのコーナーの存在自体が異質だったわけじゃないが、その中の一つのテレビを取り囲むようにして大勢のギャラリイが集まっていたのだ。気になった僕は、その中の少しオタクっぽいメガネの人に聞いてみた。

「すみません、一体何を見ているんですか？」

「ああ、今からゲームの世界記録保持者が、そこの試遊コーナーでプレイを披露するんだよ」

「世界記録？」

「ほら、スーファミのソフトでスーパーマリアって横スクロールア

クシヨンゲームがあるだろ。その世界記録保持者だよ」

「えっと……その人はどういう世界記録を持っているんですか？」

「クリアまでのタイムを競う、リアルタイムアタックの記録だよ。この業界じゃRTAって呼ばれているやつさ。君も見てみるよ」

「は、はあ」

スーパーマリア。確かスーファミ本体と同時発売された目玉ソフトで、日本で一番知名度があるマリアシリーズのスーファミ版だ。ちなみにマリアとは赤い帽子がトレードマークの配管工の姿をしたキャラクターであり、様々なギミックが配置されたコースを走破するのが目的だ。横スクロールアクションゲームとしての完成度の高さは今でも十分に通用するほどで、シンプルながらテンポ良く楽しめるゲームだ。けど、僕が初見の状態からクリアするまでに最低でも三日はかかった記憶がある。いくらゲーム自体がシンプルとはいえ、ステージ数だって多いし、終盤になれば難易度だって跳ね上がる。そのソフトを店頭でタイムアタック？ 一体どんなプレイなんだろう。生憎、プレイしている張本人の姿はギャラリーに埋もれてしまい見えなかったけど、少し高めに配置されているテレビでそのプレイを見ることができた。

まず僕が見てすぐ気づいたのは、画面の中のマリアが一切足を止めないということ。ステージに配置された落とし穴も敵キャラもブレーキを一切使わずに、ジャンプとダッシュを使って駆け抜けていく。その動きは華麗にして流麗。ステージ内に配置された巧妙な仕掛けの罠ですら、突風のように突破していくのである。アクションゲームというよりは、まるでレースゲームをプレイしているかのような感じだ。そして、その勢いのまま、最初のステージをアッサリとクリアしてしまった。時間は間違いなく一分を切っている。僕はそれだけすごいと思ったのだが、

「まだまだ。これぐらいで驚いちゃいけないよ」

オタクの人は僕にそう言った。確かに、周りのギャラリーは一切騒いでいないし、もしかしたら、これぐらいはできて当たり前前のプ

レイなのかもしれない。

それでも僕にとっては衝撃なプレイだった。

その後も全く同じ展開が続く。相変わらずゴールに向かって全力疾走するマリア。ブレーキが壊れたレースカーのように次々とステージを走破していった。

すると、遂に最初の中ボスと対面した。このボスはゲームにおけるチェックポイント的な存在で、少し大きい亀のモンスターがマリアに立ちほだかる。普通、ゲームのボスというのは、主人公を追いつめ込むためのキャラであり、それなりに歯ごたえがあるように設計されているはず。しかし、勝負がついたのは一瞬だった。マリアの電光石火のジャンプでボスが端に押し込まれ、そのままステージ脇の溶岩に落ちていったのである。まるでその辺にいる雑魚敵を踏み潰すかの如くボスを倒してしまったのだ。時間にして……四秒程だろうか。そして、ゲームが物語の紹介のインターバルに入ると、ギャラリィから拍手が沸き起こった。

「すごい……」

僕も釣られて拍手していた。

「すごいでしょ。あの人は完全にボスの動きをパターン化しているからね。でも驚くのはここからだよ」

その人の言うとおり、その後もすごかった。除々に難易度の上がるステージもお構いなしに、相変わらずの全力疾走で駆けていく。そして、気づけばゲーム開始十分経たないうちに最後のステージまで辿り着いたのだ。しかし、そこでも展開は変わらない。難易度が跳ね上がったステージの仕掛けを次々と突破し、僅か数分でラスボスの部屋に辿り着いたのだった。ラスボスは、マリアの永遠のライバルとも言えるカップパ。亀の怪獣のようなゴツイキャラクターが相手だ。どのマリアシリーズ作でもカップパは強敵で、このスーパーマリアにおいてもそれは例外じゃない。しかし、そんなラスボスも、このマリアには通用しなかったようだ。本来ならボスであるカップパがマリアに怒涛の集中攻撃をして、操作するプレイヤーがてんやわ

んやになるのがオチだ。けど、画面に映っていたのは、完全にパターンを読みきり、カップを完全に手玉に取っていたマリアだった。カップが吐く炎は完全にかわされ、投げたはずの障害物はマリアに吸い込まれるようにキャッチされ、そして逆再生しているかのようにカップ目掛けて投げ返されている。ロス球は一つも無い。終わってみれば、道中の中ボスと変わらないぐらいのスピードで画面の外に散っていくカップ。エンディングとスタッフロールが画面に流れると、再びギャラリーの拍手が沸き起こった。

「タイムは……十三分四十秒です！」
ストップウォッチを片手に計測していた人がクリアタイムを告げた。

早い、早すぎる。僕がクリアするのに少なくとも三日はかかったソフトを、わずか十五分足らずでクリアしてしまうなんて。すごいプレイだったのは認めるが、何となく僕の非力さを感じる複雑な気分だった。しかし、周りの反応は、

「あゝ惜しいな。記録は塗り替えられなかったか」

「やっぱり、あそこでジャンプのタイミング少しズレたのが大きかったかな」

「ドンマイドンマイ。グッジョブでしたよ！」

と、むしろそのタイムを惜しむような発言が飛び交っていた。今、僕が目にしたプレイでも、ベストタイムじゃないってことなのか。一体、RTAってどんな世界なんだろう。僕は、自然と好奇心が沸いていた。

少し経つと、ギャラリーも少しづつ散り散りになったので、どうしてもプレイしていた人の顔が見たかった僕は、本人との接触を試みることにした。やはりゲームをやりこんでいそうなオタクさんなんだろう。それとも、会社員風のおじさんが昔ゲームで鍛えた腕を披露していたのだろうか。僕は、テレビの前にいるプレイしていた張本人に声をかけた。

「す、すいません。クリアおめでとうございます」

「ありがとう。けど、ごめんね。新記録見せられなくて」

そう言ってこっちに振り返った張本人は、僕がどこかで見たことある顔だった。これから最低一年間は見ることになるであろう顔。そして、僕が好きな人の顔。

「えっ、こ……香坂さん!？」

「み、宮市……君？」

ゲームのコントローラーを握っていたのは、制服姿の香坂さんだった。とっさに持っていたコントローラーを背中に隠して、僕に何か言おうとしている。しかし、

「あ、あの……えっと……その……あれなのよ!」

パニック状態になっているからか、まるで言葉になっていない。

そして、香坂さんは急いで鞆を手を持ち、

「ごめん!」

それだけ言って店の外へ走って行ってしまった。

結局、何も分からずじまいの僕は、そのまま家に帰りベツトに横たわり考えてみた。間違いない。あそこでゲームをしていたのは間違いない香坂さんだ。着ていた制服は、うちの学校の物だったし、何より僕の名前を反射的に呼んだのだから確定だろう。けど、問題は どうして彼女があそこでゲームをプレイしていたのか、そして、彼女は本当に世界記録保持者なのか。いくら考えてもそこだけは分からなかった。でも、僕に声をかけられて逃げた時の様子を見るに、あまり顔見知りに見られたくない場面だったのかもしれない。

うあ、そう考えると最悪だ。明日から学校で一切口を利いてくれないかもしれない。……まあ、今日の出来事の前から満足に口は利いてくれないけどさ。でも、何か一縷の望みが本当に絶たれたような気がする。そう考えると、何であんな店に立ち寄ったんだろうって後悔してしまう。でも、彼女が少なくともゲームをするってことも分かったしなあ。これが怪我の功名というやつなんだろうか。ともかく、明日彼女がどう出るか様子を見ることにした。

いざ、翌日を迎えてみると僕のテンションは低かった。そりゃそうだ。一日寝てから、冷静に考えると、好きな女の子の見られなくなかったであろう場面を偶然発見してしまい、しかも、そのままダッシュでエスケープされたのである。ショックな訳が無い。しかも、その相手は、学校で僕の席の前に座っているというのだから、最悪。正直、学校だってズル休みしたかったさ。まあ、そんな理屈が担任の先生に通じるわけが無いので、渋々学校へ向かった。

どうしよう、クラス中に『宮市シカト』とかいう紙を回されたり、教室に行ってみたら僕の机だけ無かったりしたらどうしよう。そんなこんな考えながら通学路を歩いていたもんだから、学校に着

く頃にはすっかり気落ちしてしまったのだが、教室に入るとそれが杞憂だったことを知る。クラスの僕への反応もいつもと変わらなかったし、僕の机がベランダに直行しているということもなかった。なにより、目の前の席には香坂さんがいつも通り座っていたのだ。しかし、僕が教室に入っても香坂さんは、こちらをチラリとも見なかった。ガン無視である。やっぱり、あの場面の出来事は無かったことにしてほしいのかな。と思い、僕も特に何も言わない決意をして、自分の席に着いた。だが鞆から机へと教科書を入れるようとすると、机の中に何かが入っていることに気づく。白い封筒だった。僕は他のクラスメイトに気づかれないように中を見ると、そこには手紙が入っていた。ピシッと揃った文字で書いていた言葉は、

『今日の放課後、体育館裏で待っています』

というものだった。宛名は書いてなかったが、差出人に心当たりはあった。

手紙を受け取ってからというものの、その日の授業は、まるで集中できなかった。差出人は多分、香坂さんだろう。というかそれ以外に心当たりがない。それより僕が一番怖かったのは、わざわざ体育館裏に呼び出して何をするのか、ということだった。体育館裏といえば、女の子が告白するスポット及び不良の皆さんが集っているであろうスポット。そう考えると前者の可能性は限りなくゼロに近いので、残るは後者のみ……か？ 僕の記憶を消そうと、竹刀でボッコボコにするつもりなのだろうか。何を考えても、嫌な予感しか頭に残らない。

ともかく、行かないと何も始まらないので放課後、僕は体育館裏を訪れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9143t/>

今日からRTA部！

2011年6月10日10時10分発行